

◆ 今週のコメント

- ・ 感染性胃腸炎の定点当たり報告数は14.02(575例)で、前週(14.02, 611例)より減少したものの、依然として過去5年平均値を大きく上回っています。
- ・ 水痘の定点当たり報告数は1.59(65例)で、前週(0.98, 40例)に比べ増加しています。年齢群別では、2歳が16例(24.6%)と最も多く、次いで3歳が15例(23.1%)で、0歳～3歳が72.3%を占めています。例年、年末に向かって報告数が増加しますので、今後の動向にご注意ください。
- ・ RSウイルス感染症の定点当たり報告数は0.78(32例)で、依然として、過去5年平均値を大きく上回る状態で推移しています。年齢群別では、2歳以下で87.5%を占めています。

◆ 今週のトピックス: <インフルエンザ>

インフルエンザの定点当たり報告数は0.21(14例)で、先週(0.08, 6例)の約2.4倍に増加しています。詳細をトピックスに掲載しています。

◆ 発生状況

全数把握の感染症

- ・ 二類:結核 5例(肺結核 2例, その他結核 2例, 潜在性結核感染者 1例)うち喀痰塗抹陽性 なし
【1月以降の累積報告数 432例(肺結核 180例, その他結核 91例, 潜在性結核感染者 161例)うち喀痰塗抹陽性 88例】

定点把握の主な感染症

(市内定点数 インフルエンザ定点68, 小児科定点41, 眼科定点10, 基幹定点1)

定点	感染症名	定点当たり報告数	報告数
インフルエンザ*	インフルエンザ	0. 21	14
小児科 (降順5位まで)	① 感染性胃腸炎	14. 02	575
	② 水痘	1. 59	65
	③ A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0. 90	37
	④ RSウイルス感染症	0. 78	32
	⑤ 突発性発しん	0. 24	10
眼科	流行性角結膜炎	0. 60	6

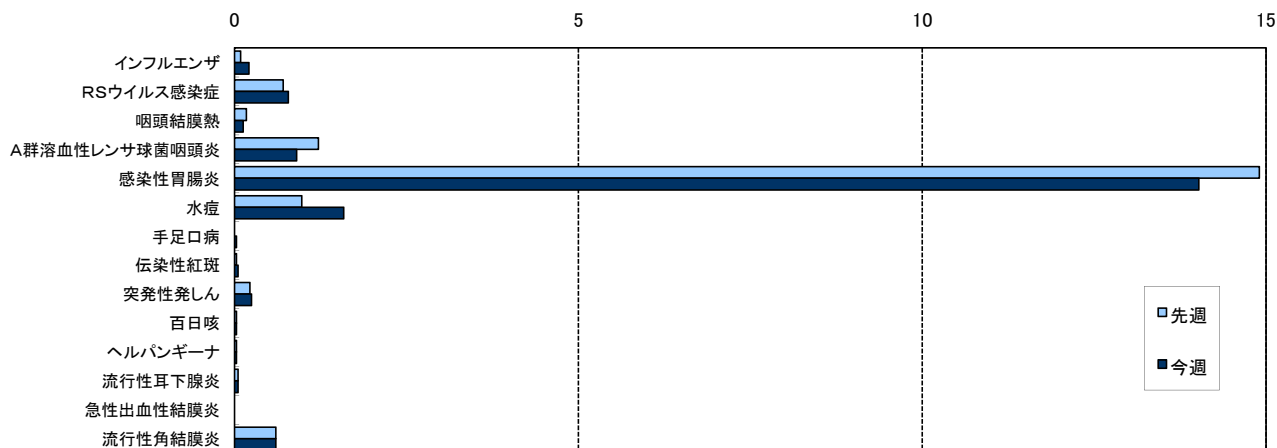
【次ページ以降の主な内容】

発生状況の概況グラフ / 今週のトピックス: <インフルエンザ>

(注) 京都市のデータは、平成24年12月20日現在の報告数で、全国の還元データと若干異なる場合があります。
また、本情報での患者数は、届出医療機関所在地での集計で、患者の住所を示すものではありません。

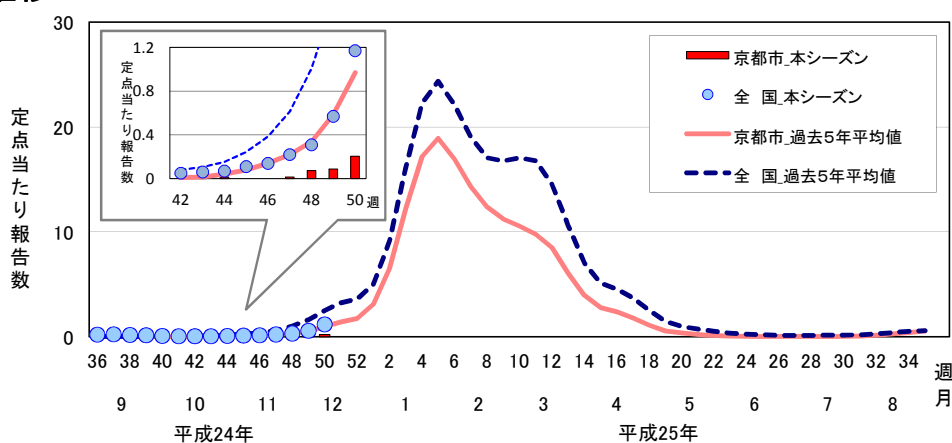
◆ 発生状況の概況グラフ

1 今週(第50週)と先週(第49週)の定点当たり報告数の比較



2 インフルエンザの推移

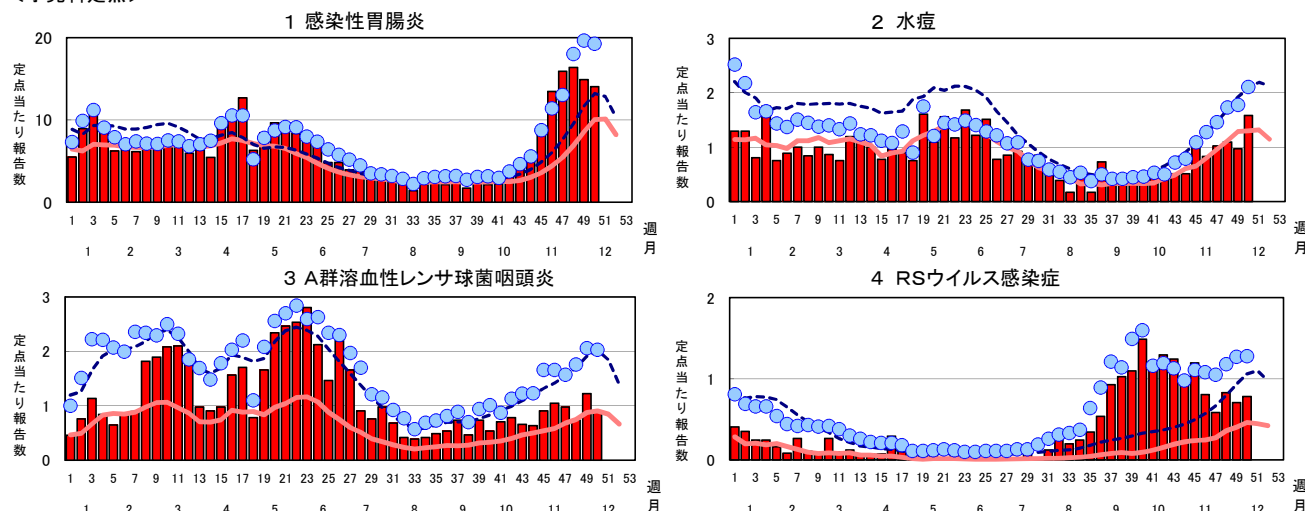
週	報告数(例)
第46週	0
第47週	1
第48週	5
第49週	6
第50週	14
累積報告数 (第36週以降)	29



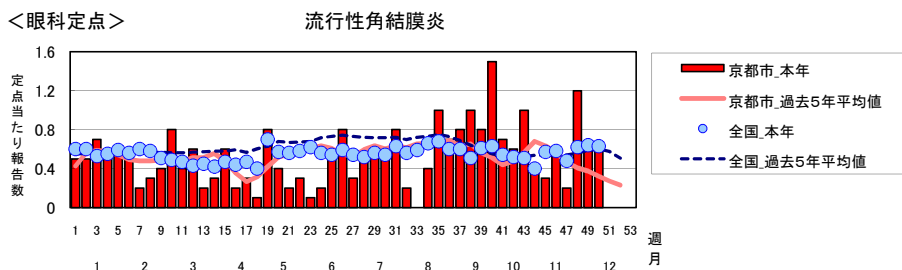
* 平成21年/22年シーズンは、インフルエンザ(H1N1)2009の影響で、例年と流行傾向が大きく異なるため、過去5年平均値の算出には使用していません。

3 主な感染症の定点当たり報告数の推移

<小児科定点>



<眼科定点>



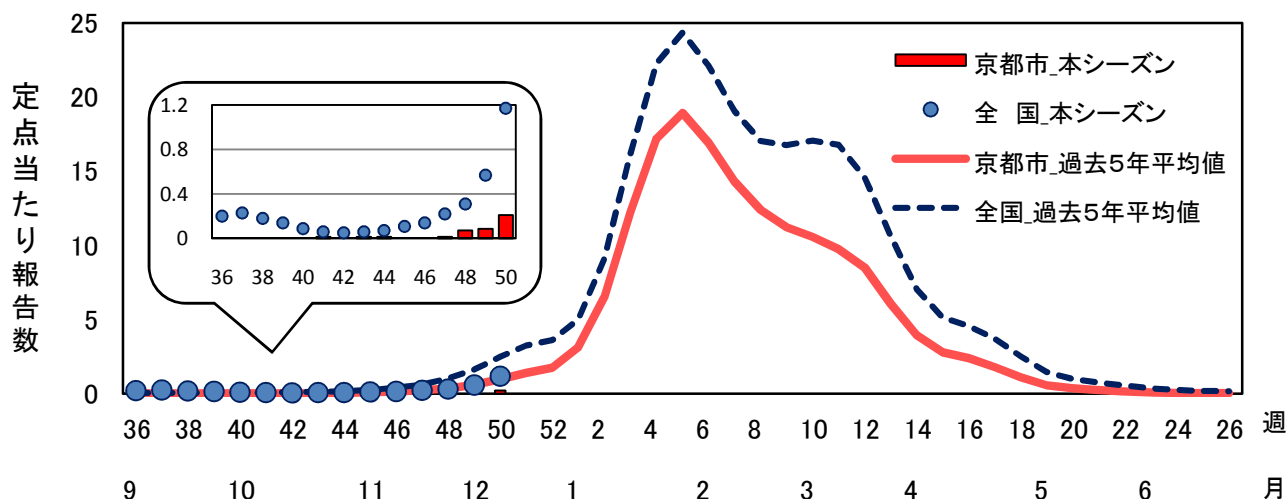
第50週(12月10日～12月16日)トピックス: <インフルエンザ>

インフルエンザの定点当たり報告数は0.21(14例)で、先週(0.08, 6例)の約2.4倍に増加しています。全国においても倍増し、定点当たり報告数が1.17となり、流行開始の目安となる1.00を超えました。今後の動向にご注意ください。

都道府県別では、前週より44道府県で増加しています。近畿6府県では、すべてで増加しています。

京都市衛生環境研究所では、11月に受け付けた検体から、A(H1pdm09)が1例分離されています。全国のインフルエンザウイルス分離・検出報告状況(12月21日現在)をみると、今シーズンはA(H3)亜型が約80%を占めています。

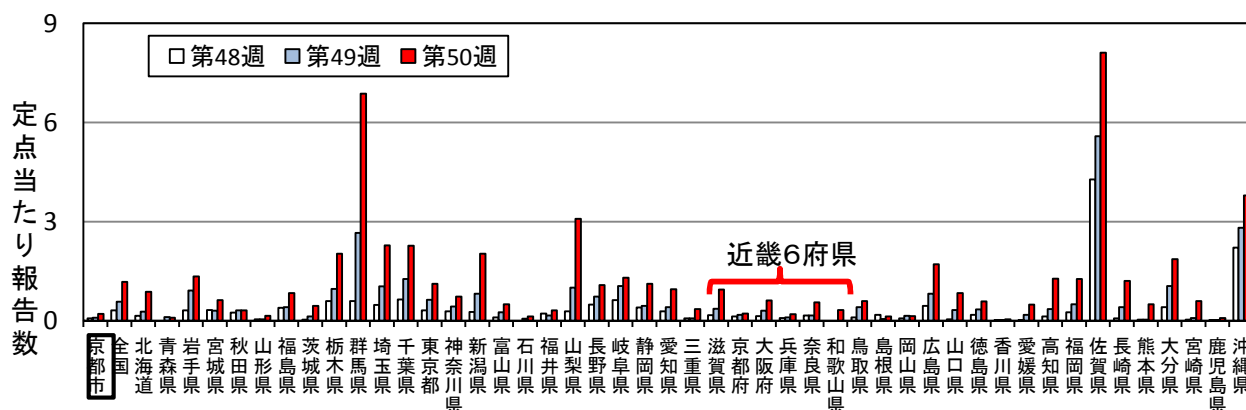
本市及び全国の定点当たり報告数の推移



※平成21年/22年シーズンは、インフルエンザ(H1N1)2009の影響で、例年と流行傾向が大きく異なるため、過去5年平均値の算出には使用していません。

注) 先般、2009年に大流行したインフルエンザはインフルエンザ(H1N1)2009とすることが決められています(厚生労働省)。また、その原因ウイルスについてはWHOはA(H1N1)pdm09と記載することを勧めています。国立感染症研究所ではN型の型別判定をしていないときはAH1pdm09と略記しています。

都道府県別定点当たり報告数の推移



全国のインフルエンザウイルス分離・検出数(12月21日現在)

